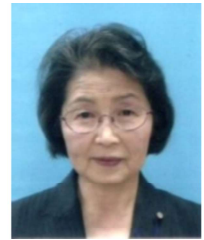


ガバナー補佐自分を語る

I'm「馬女(マジヨ)」

国際ロータリー第2510地区 第8グループガバナー補佐

高村洋子 (様似RC)



桜舞い散る牧場の中で、今年産まれた“とねっこ(仔馬の総称)”の成長と次年度の受胎に向けて、日々トラックのハンドルを握る「鉄の女」を地でいっています。

私は、桜の名所「新ひだか町静内の二十間道路」が通学路として育ちました。雨の日も雪の日も自転車通学でした。二十間とは昔の尺貫法で言う並木の幅を示し、距離は8kmにも及びます。

現在の一大観光地“二十間道路桜並木”は見応えのある街道と成長していますが、歴を遡りますと大正の初め頃に植樹された「桜の幼木」は当時まだまだ幼さを残した細枝の為、父母や近くの集落民は年に幾度となく下草刈り、雑木等の手入れに汗を流していた事を記憶しています。

隣接する農林省の山林を伐採し「農地開拓」を目的として民に払い下げた事を受けて、農家の次男、三男は開拓者として入植したそうです。私の父もそうでした。長兄は戦地で戦争捕虜として炎天下にさらされ、終戦帰国したものの廃人と化した兄の姿に愕然とし、本家を思うあまり分家を断り自ら試練の道を選択したそうです。父は幼くして両親を亡くしていたので、生家に対する想いが一層深いものであったとの事。責任感が人一倍強く、自身が貧しい身分でありながら困窮する近隣に援農し、時に金品までも貸してしまう、揺さぶられた魂を何処までも貫く超お人好しでした。病弱な母でしたが、懸命に寄り添った姿が今も鮮明です。

「遊ぶ」という二文字を持ち合わせていなかった両親の元で子供時代を過ごした私達兄妹は、学校が休みの時も楽しい時間など無く不満ばかりでしたが、裏表の無い性格と困っている人を見過ごせない、自分の仕事をさて置いてまで手助けする姿は、正に「奉仕の精神」であったと気づかされます。

学業を終えた後、地元金融機関、自動車販売会社、シンジケート等の勤務経験を経て現在地に嫁ぎました。そして、女性には極めて珍しい競走馬の育成調教する騎乗者として、18年程経験を積む。この、騎乗経験が私の今につながっていると思うのです。その頃牧場での女性の立ち位置は、手伝い作業員と家事労働でした。

やれば出来る！女性にチャンス&チャレンジを。名牝クラブ、北海道女性農業者ネットワーク(きたひとネット)、日高軽種馬ネットワーク(馬女ネット)と女性の知識、技術の向上に向けた団体の設立に奔走する。声を大にして“女性の意識改革”を目標として来た人生です。

RI会長が初の女性会長！

そんな折に第8グループ初の女性ガバナー補佐を担う事が全くの無関係とは思えないのです。

ロータリアンとなって二十数年の私自身は二人の足元にも及びませんが、少しだけ流れている血潮「職業奉仕の精神」と思っています。

第8グループガバナー補佐としての役割も残り1ヶ月半を残すだけになりました。タイムリミットまで全力で楽しむ！と言い聞かせてペンを置きます。

